

### 1年目（2016）

- ・復旧工事と「記憶の継承」の調整（失われる震災遺構）

### 2年目（2017）

- ・「記憶の継承」の大きな方向性

町内の人達への  
記憶の継承を！

### 3年目（2018）

- ・「記憶の継承」に向けた準備活動の開始  
（防災教育、震災遺構保存活用、「みんなでツナグ」、記憶マップ）

### 4年目～5年目（2019～2020）

- ・活動の継続（他事業と整合をとりながら）

2021/4/14・16 5年間の振り返りとこれから  
（「記憶の継承」の開始）

### 6年目～10年目（2021～2025）

- ・町内での日常的な「継承」活動を展開

震災の時に…

- ・生まれた子が5歳（もうすぐ小学生）
- ・5歳だった子が10歳（もうすぐ中学生）
- ・15歳だった子が20歳（町内にいない？）
- ⋮

「記憶の乖離」が  
不可逆的にどんどん進む

「記憶の継承」の準備

“場”やツール、  
意識の準備  
（分かっている人  
同士での活動）

- ※外の方への  
「記憶の伝達」は  
行われてきた
- ・語り部活動
- ・スタディツアー
- ・教育旅行

「記憶の継承」

知っている人  
→知らない人  
への継承開始  
（町内でも差が発生）

## 2. 震災記念公園整備の目的（5年目を迎えるにあたってあらためて…）

### 震災記念公園の整備 = 記憶の継承の“場”づくり

R3年度にやっていくこと



- 「震災の記憶」の概要を伝える場所  
→ “ストーリー（誰かの主観）”だけでなく  
“客観的な事実”の整理も重要  
→ “客観的な事実”を伝えていく設備を整備  
（復興まちづくり支援施設+役場）

① 施設はR3年度末に竣工。  
施設整備に合わせて展示設備の  
設計・施工に取り組む。

- 校区（地域）別の震災の記憶を伝えていく場所  
→ “ストーリー（地域の主観）”を最重要視  
→ 各集落で整備が進む避難地・緑地等を活用

拠点の位置づけは  
活動支援と  
セットで取り組む

② 継続的に「記憶の継承」を  
行っていく仕組みの構築

- まちづくり活動支援助成金の活用  
「記憶の継承」を一つの助成テーマに加える
- 「記憶の継承」サポートセンターの設立の検討  
（コミュニティーアーカイブの推進）
  - ・ メディアの受け取り／言葉の受け取り
  - ・ （語り部）動画の撮影

## ①中心拠点はどうな展示にしていく？（拠点内の位置付け）

### （基本的な考え方）

- 「記憶の継承」＝町民の方に向けた取組を第一とする  
→中心拠点（役場・復興まちづくり支援施設）での「記憶の継承」も、町外から来られた方に向けたものを第一と考えるのではなく、町内の方で役場に来られた方が、日常的に「継承」していくためのものとする。  
（もちろん、町外から来られた方が見ることも想定。しかしそこを中心としては考えない。）

### （中心拠点の位置付け）

- 役場と復興まちづくり支援施設について、それぞれ以下のような位置付けとする。
  - ①復興まちづくり支援施設は、日常的に役場内公園に来る人達や地域学習の学童が訪れて、将来にわたって震災の記憶を正しく継承できるように、出来事を時系列に整理していく展示を実施。（**くらしの記憶、活動の記憶**）
  - ②役場内公園には、震災で亡くなった方に想いを寄せる（亡くなった方がいらっしゃることを決して忘れない）ためのモニュメントを設置（**いのちの記憶**）
  - ③役場新庁舎の展望デッキの前室となる4FのEVホールで、益城町全体の地形やそこでの生活、被害状況等を把握できるような展示を実施。（**大地の記憶、くらしの記憶**）
  - ④展望デッキから益城町全体を眺望。そこで自然の「脅威と恵み」と寄り添って生きてきた益城町を理解。（**大地の記憶**）

# ①中心拠点はどんな場所？（各施設や場所を上手に活用しながら、連続性も持たせる）

1

## 【くらし・活動の記憶】

発災当時の状況や人々の行動、その後の動きなどを、時系列で客観的に学ぶ。語り部の会などで“主観的”な記憶も学ぶ。

### 【活用例】

- ・ 語り部の会イベント
- ・ 企画展示会（ミナテラス等と連携）

### 【施設参考例】

- ・ 人と防災未来センター（神戸市）

2

## 【いのちの記憶】

「亡くなった方がいらっしゃる」という事実を、ずっと忘れずに、大事に継承していく。

### 【活用例】

- ・ モニュメント等の設置 など

### 【公園活用参考例】

- ・ 東遊園地（神戸市）

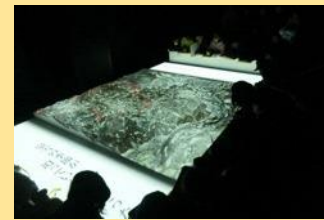
3

## 【大地・くらしの記憶】

町全体の地形や環境、そこでの生活や被害状況等を把握できる場所。益城町で“なぜ”地震が起きたのか、自然によって、町にはどんな恵みがもたらされるのか等についても学ぶ。

### 【施設参考例】

- ・ やまこし復興交流館おらたる（長岡市）



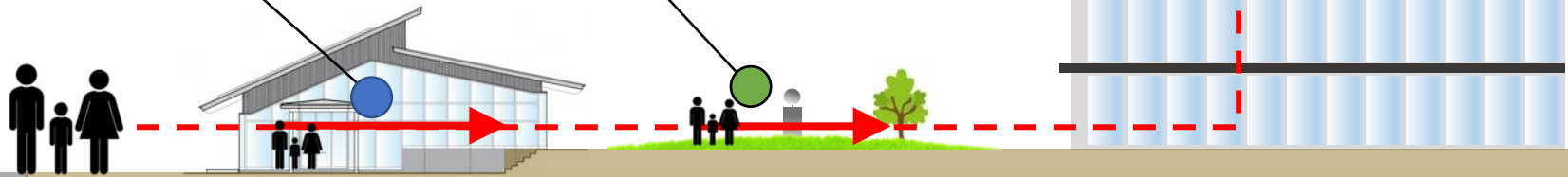
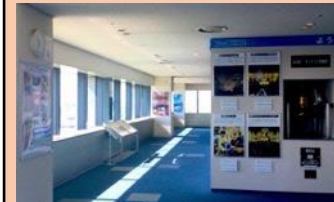
4

## 【大地の記憶】

学びを踏まえて、実際の町の様子や風景を眺望。

### 【施設参考例】

- ・ 神戸市役所 展望ロビー



交通広場

復興まちづくり支援施設

役場内公園

益城町役場新庁舎

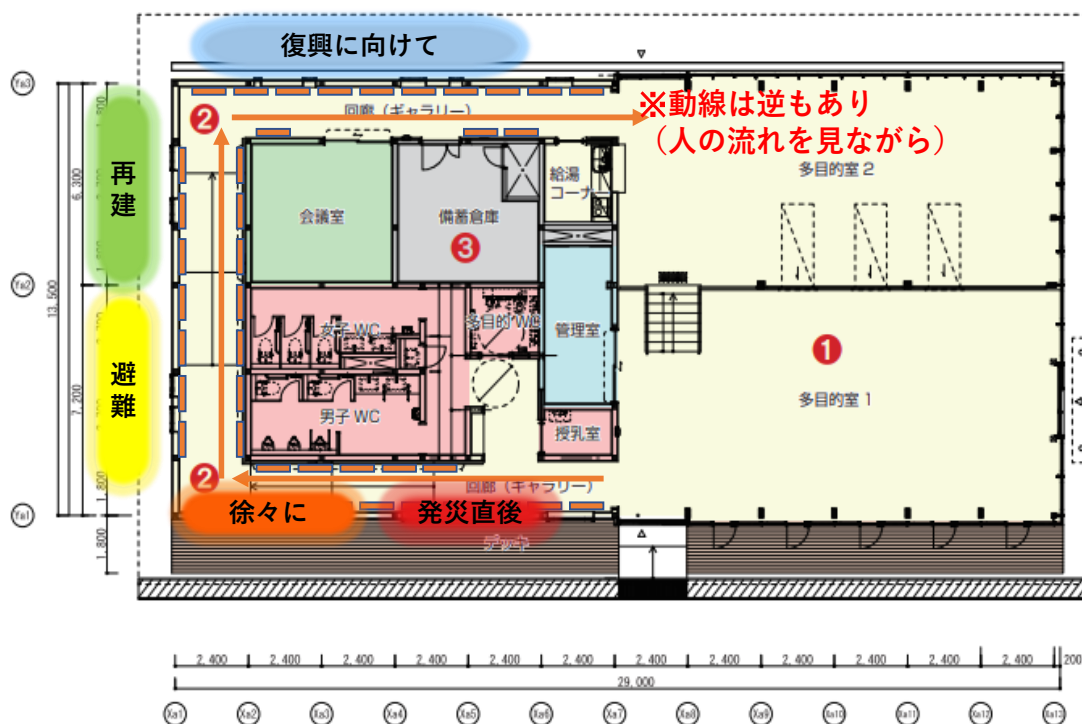
S ← → N

## 4. 震災記念公園中心拠点の展示イメージ (案)

## 1. 復興まちづくり支援施設の展示案 (R3年度事業)

- 日常的に役場内公園に来る人達や地域学習の学童が訪れて、将来にわたって震災の記憶を正しく継承できるように、出来事を時系列に整理した展示を実施。
- 西側のスロープの壁面部分を活用した展示がメイン。(例：グラフィックパネル、現物展示など)

## 【レイアウト案】



1階平面図 (1/200)

## 【参考イメージ】

人と防災未来センター (兵庫県神戸市)



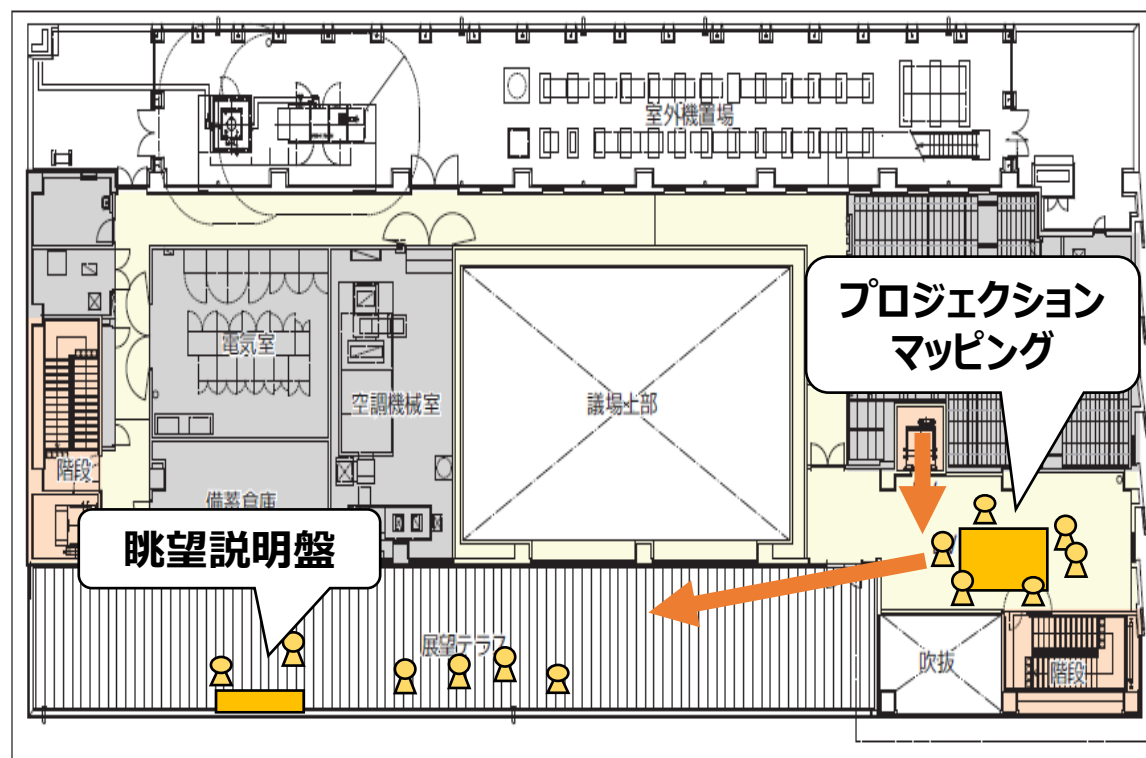


## 4. 震災記念公園中心拠点の展示イメージ (案)

## 2. 役場新庁舎の展示案 (R4年度事業)

- 4FのEVホールで、町全体の地形やそこでの生活、被害状況等を俯瞰的に把握できるような展示を実施する。 (例：プロジェクションマッピングや説明盤など)
- その後、展望ロビーから実際の町の地形を眺望しながら、自然の「脅威と恵み」と寄り添って生きてきた益城町の姿を理解する。

## 【レイアウト案】新庁舎4階



## 【参考イメージ】

やまこし復興交流館 おらたる  
(新潟県長岡市)

